

屋久島山岳トイレの現状

小原 比呂志（屋久島野外活動総合センター）

2010年3月9日 平成21年度第5回屋久島山岳部利用対策協議会において、屋久島山岳地のトイレに関して、環境省より下記のような方針が示された。

以下引用~~~~~

平成22年以降のトイレ整備及び携帯トイレ導入方針

- ・屋久島は世界自然遺産としての厳格な保護が求められる地域であり、かつ、各小屋へのアプローチが長いことから、現状の利用のピーク時に十分に対応するトイレの整備は困難である。
- ・自然環境への影響を鑑みても、入込者数は一定の範囲でコントロールすべきであり、トイレのあり方についても、山岳部の適正な利用の議論の一つとして取り扱う。
- ・宿泊利用者、日帰り利用者双方の入込者数のコントロールを前提とした上で、山岳部のし尿量を減らすことを基本として、宿泊者による小屋でのトイレ利用とそれ以外のトイレ利用（日帰り、宿泊者の小屋以外でのトイレ利用）に分けて対応を行う。
- ・全利用者共通の対応として、可能な限り、出発前に麓で用が足せるように登山口や登山バス発着点における環境整備を進める。
- ・宿泊者による小屋でのトイレ利用に対しては、自己処理型トイレの整備と携帯トイレの利用を並行的に推進する。平成22年度に自己処理型トイレの整備を宿泊者の多い新高塚小屋に試験導入し、その結果を踏まえた上で他の小屋のトイレ整備を検討する。なお、既存の汲み取り式トイレは、自己処理型トイレの故障時対応のため撤去せずに当面併用する。
- ・日帰り利用者及び宿泊者の小屋以外でのトイレ利用に対しては、大きく縄文杉ルートと宮之浦岳ルートに分けて対応を行う。
- ・縄文杉ルートについては、既存のトイレが要所に整備されていることから、これらのトイレの適切な維持管理に努め、万が一の場合に備え、補完的に携帯トイレの利用を進めるものとする。また、既存のトイレが故障するなど、何らかの事情で使用できないときは、積極的に携帯トイレの利用を推進する。
- ・宮之浦岳ルートについては、登山口から1.6kmの位置にある淀川小屋以降トイレがなく、新規に自己処理型トイレ整備が困難な脆弱な環境であることから、要所に常設携帯トイレブースを整備し、携帯トイレの導入を積極的に推進する。

2010/03/09 平成21年度第5回屋久島山岳部利用対策協議会 資料抜粋

以上引用~~~~~

色々な含みをもたされた文章になっているが、実効性のある部分を要約すると

- ①登山利用者をコントロールして尿尿量を減らす
- ②登山のスタート地点のトイレを整備する

- ③新高塚小屋に自己分解型トイレを試験導入し、その結果に基づいてその他の小屋のトイレについて検討する。
 - ④トイレが設置できないところは携帯トイレの利用を推進する。
- この4点である。

環境省は新高塚小屋の自己処理型トイレ（TSS式土壌浸潤型トイレ）の建設に取り掛かり、実に1億円の予算をかけて2011年5月にこれを完成させ、試験運用ののち、7月1日、供用を開始した。

このトイレは非常に管理に手のかかる、デリケートなものである。当初管理を受託したあるガイド業者が無責任にも途中で管理を放り出したため、2012年からは屋久島観光協会ガイド部会有志が引き受ける形で、環境省や屋久島町の担当者と協力しながら当番制でこの管理に当たってきた。

2013年7月26日、屋久島観光協会が新高塚小屋トイレの閉鎖を発表した。すでに夏休みシーズンに入ったこの時期のトイレの故障はかなりの混乱を引き起こしたが、併用していた汲み取り式の旧トイレ一基のみでなんとか夏は乗り切った。しかしTSS浸透式トイレはその後も閉鎖されたままで、復旧のめどは立っていない。

このトイレは別図のとおり、尿尿を消化槽で微生物分解し、スカムと汚泥を分離したのち、屋根つきの土壌処理槽にしみわたらせ、土壌吸着と浸潤蒸発散処理を行う仕組みになっている。定期点検のさいにスカムと汚泥はチェックできる。ところがこの処理方法の蒸発散が起こらなくなってしまったのだ。

浸潤蒸発散を行う土壌処理槽は、広く浅いプールに必要量の土壌を入れてある。ここに入った処理水が期待通り蒸発散せず、処理土壌が水で飽和してしまい、いわばドロドロ状態に陥った。当然あらたな処理水は吸収されず、便器側がつまってあふれる事態になってしまったのである。

普通であれば、管理担当者がメーカーの技術者に来てもらい、何としても打開策を見出すべきなのだが、これが行われていない。

屋久島町の担当部署・環境政策課によると、この件に関しては現在「とりあえず見守る」ことになっているそうである。20年前に造られたきりの汲み取りトイレ1基を引き続き使うことにし、利用者にはなるべく携帯トイレを使うことを呼びかけるとのこと。

冒頭に挙げた方針の「試験導入し、その結果を踏まえた上で他の小屋のトイレ整備を検討する。なお、既存の汲み取り式トイレは、自己処理型トイレの故障時対応のため撤去せずに当面併用する」という部分が見事に的中してしまったわけだが、1億円という予算をかけて作ったものを、試験運用なので調子が悪いのも結果のうちだといって放置して良いものではないだろう。

町環境政策課は、環境省がこの失敗ですっかり避難小屋のトイレを順次整備してゆくという合意を、放り出してしまおうのではないかと警戒している。観光協会ガイド部会側も、携帯トイレはあくまでも補助的なものとして使うのであって、うまくいかないからといって、携帯トイレの使用を登山者に押しつけるのはおかしいと考えている。

新高塚小屋の他に、利用者の多い小屋のうち、高塚小屋では一基ある汲み取り式トイレの外装のみ新しくされ、淀川小屋では携帯トイレブースが置かれたものの、いずれも現在改善の計画はなく、必要に応じて人力搬出をしている。

利用が比較的少ない鹿之沢小屋、石塚小屋は特に急を要する状態ではなく、汲み取り式トイレの適宜人力搬出で処理している。

林野庁と屋久島町が管理責任をもつ白谷山荘は、改善の検討すらなく、強い悪臭のある小屋内の汲み取り式トイレ二基のまま使われ続け、白谷雲水峡の汚点となっている。これも必要に応じて人力搬出が続いている。

新高塚小屋にTSS式土壌浸潤型トイレが導入され、屋久島のトイレも新時代を迎えるかと思われたが、不具合で現在頓挫し、その他のトイレの改善も中に浮いている。携帯トイレで登山者に負担を追わせて済ませてしまえと言わんばかりの対応は首をかしげざるを得ない。

ハードを全く整備せず、利用者から募金名目で金をとり、人を雇って搬出させる費用にそれを充てるという現在のやり方では、責任機関が何もしていないに等しい。世界遺産登録20周年を迎えながら、残念ながら屋久島の山岳トイレには、いまだに何も進展がないと言わざるを得ない状況である。